

真の福音の初め

マルコ福音書1章1～11節
2023年1月1日
松田 基子 師

クリスマスに人の子となってこの世に誕生された、神の御子イエス様は、完全な人間として、他の人間と同じ成長の道を歩まれました。ただ、他の人と違っていた事は、罪を犯されなかった事です。名も無い貧しい大工の子の長子として、両親に仕え、弟妹の世話をし、ヨセフの亡き後は、一家を支える苦勞の多い日々を過ごされました。しかし、それは人の生くる悩み、苦しみを知り、人を愛し、労る為でありました。

イエス様は長ずるに従って、神様への全き服従に心を注がれました。そして、神様の御心を世に伝える為に、神様からの出発命令を待っておられました。当時、紀元30年代のイスラエルはローマの支配下に置かれていましたが、ユダヤ教は認められ、宗教活動は許されていました。エルサレム神殿は、ローマの傀儡(かいらい)政権である、ヘロデ大王から始まった施策によって、壮麗な大神殿に改修され、儀式など神殿活動は盛んに行われていました。

しかし、その神殿を直接管理、運営する上級祭司たちは、傲慢で安逸を貪っていました。一方、モーセの律法を重んじ、国の隅々まで律法生活を指導していた、律法学者達と、追従するファリサイ派の人々は、律法に込められた神様の御心を求めるのではなく、律法をもの差しにして、測り合う律法監視社会を作っていました。その様な生き方に対して、

『それは、神様の御心ではない。』
と反発して、

『もっと神様の前に聖く生きるべきだ。』
と、世俗を脱して、荒れ野で清さを求める生活をする人々もいました。彼らは身を清める沐浴、一定の断食、祈り、黙想、聖書の写本をする生活を送りました。

この人たちは、神殿の上級祭司の非信仰的な生き方に反発した、下級祭司の出身者が多かったとされています。ここに、下級祭司の子

供で、その誕生の時から、神様に特別に選ばれた預言者がいました。その名はヨハネと言いました。ヨハネはヤハウエ、すなわち、

『主なる神』は恵み深い。

と言う意味です。さて、マルコによる福音書の著者は、イエス様が神の御子、メシアとしての働きを始められる前に、このヨハネを先駆者として、その働きを記しています。

マルコによる福音書1章1節には、

「神の子イエス・キリストの福音の初め」

とあります。福音と言う言葉の意味は、

『良い知らせ』

と言う意味です。古代に於いて良い知らせと言えば、戦いに勝った戦勝の知らせや、皇帝や王の誕生や、即位の知らせを意味しました。当時の異教社会では、皇帝や国王を神と崇め、民衆にはその礼拝が強要されていました。

キリスト者は、人間を神とする事は出来ません。キリスト者にとって本当の福音は何かが問われました。

キリスト者にとって、神の子イエス様の誕生と生涯、人類の罪を贖われた十字架と復活、罪の赦しと、永遠の命の宣言に優る福音はありません。そこで、キリスト者にとっての福音は、全く新しい意味になりました。マルコはその真の福音の初めを、イエス様からではなく、バプテスマのヨハネから始めています。それは何故でしょうか。2節に、

「預言者イザヤの書にこう書いてある。

『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。荒れ野で叫ぶ者の声がする。主の道を整え、その道筋を真っ直ぐにせよ』

とあります。神様がイスラエルにダビデの系譜からメシアを送られることは、千年来の約束であり、ローマの压制下にあっては、悲願待望でありました。

旧約聖書の最後の書、マラキ書3章1節には、

「見よ、わたしは使者を送る。

彼は我が前に道を備える」

とあり、イザヤ書40章3節には、

「呼び掛ける声がある。

『主のために、荒れ野に道を備え、私達の

神のために、荒れ地に広い道を通せ』とあります。

マルコは、

『イエス様の出現は、神様の御計画であり、神様は御計画通りに、先駆者を送られたのだ』

と言っているのです。その先駆者こそ、あのバプテスマのヨハネだったのです。

彼は荒れ野から呼ばわれました。荒れ野、それはイスラエルにとって、奴隷の身から救出され、40年の間、神様の御言葉に従う訓練が成されたところでした。それは、**神様のみ**に信頼し、**神様の御言葉に賭けて従う所**です。神様は御自身の御言葉に従うところに、真の幸せの道がある事を、そこで教えられました。神様はそのことを、ただ要求されただけではありませんでした。出エジプト記23章20節に、

「見よ、わたしはあなたの前に使いを遣わして、あなたを道で守らせ、わたしの備えた場所に導かせる」

と約束され、その通りに約束の地に辿り着かせてくださいました。荒れ野でこそ、神様の言葉は聞けるのです。神様は神の子メシアの出現の前に、預言されて来た通りに、先駆者にバプテスマのヨハネを選び、荒れ野から神の言葉を叫ばせられました。

4節に、

「洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」

とあります。ヨハネが現れた荒れ野は、ヨルダン川が死海に流れ込む所から、死海の西側一帯に広がるユダの荒れ野です。当時の洗礼は、バプテスマと呼ばれました。水に体を浸し、体を洗うことで

『清められる。新生する』

と言う意味に理解されていました。ユダヤ教への改宗者の洗礼や、荒れ野で聖めの生活を求めた、クムラン教団などで、行われていました。ただ、クムラン教団では、清められるために、洗礼は繰り返し行われていました。

一方、洗礼者ヨハネは、メシアの来臨に、自分が先駆者として立てられた事を示されています。

したが、メシアの来臨については、神様の厳しい裁きが、メシアによってなされることを信じていました。そこでヨハネは、激しく厳しい言葉で民衆の罪を指摘しました。

彼は、マタイによる福音書の3章7節で、ファリサイ派やサドカイ派の人々に対して、

「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ」

と叱責しています。

彼は民衆に対して、徹底的な悔い改めを迫りました。その為、彼が与えた洗礼は、罪の赦しを得させる為の悔い改めの洗礼で、一回だけの洗礼でした。人々はヨハネの信仰からくる真実な言葉に胸を刺され、素直に悔い改め洗礼を受けました。ヨハネの許には、エルサレムとユダヤの全地方から、人々が次々にやって来て、洗礼を受けたのでした。民衆はヨハネに、あの

大預言者、エリアの再来を思っていました。

列王記下1章8節には、

『預言者エリアは、毛衣を着て、腰には革帯を締めていた』

事が記されています。ヨハネ自身もエリアを意識していた事が分かります。

6節を見ますと、

「ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」

とあり、その風貌はエリアそのものでした。

旧約聖書、マラキ書3章23節には、

「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリアをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって、この地を撃つことがないように」

とあります。旧約聖書はこの言葉で終わっています。民衆はエリアを彷彿とさせるバプテスマのヨハネの言葉に、神様の審判を恐れて、次々と彼の許に来て、洗礼を受けたのでした。

ヨハネは民衆の不信仰と不真実な生き方は糾弾しましたが、7節以降を見ますと、

「彼はこう宣べ伝えた。」

『わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひも

を解く値打ちもない。わたしは水で
あなたたちに洗礼を授けたが、その方は
聖霊で洗礼をお授けになる』

と人々に語り、彼は神様のまえに、心から遜り、
自分はメシアの先駆者であることから、一步も
動きませんでした。民衆にとって、バプテスマ
のヨハネは、大預言者エリアのように偉大
でした。

『彼よりも神様に近い、偉大な人が
いるのだろうか。』
と、思える程でした。

しかし、終末による神の国を待ち望むヨハネ
は、審判者としてのメシアの到来を待望してい
ました。そのお方は自分のように、罪ある人間
ではない筈です。なぜなら、そのお方は、聖
霊をお授けになることが出来るお方ですから、
神様です。本来、近付くことも出来ない存在で
す。

『自分は奴隷のように、屈んでその方の
履物の紐を解く値打ちもない。隔絶した
お方である』
と言う事を、ヨハネは信じていました。

そのお方が、もうすぐお出でになるのです。
そして、そのお方が、人間が与えることのできな
い聖霊をお与えになる。聖霊のバプテスマを
受ける事が出来る日が、そこまで来ているので
す。バプテスマのヨハネは、そのお方の到来を
一途に待ち望んでいました。そうして神様は遂
にイエス様を呼び出されました。

9節を見ますと、

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレ
から来て、ヨルダン川でヨハネから
洗礼を受けられた」

とあります。イエス様は年およそ30歳、それま
で、イスラエルの最も北に位置するガリラヤで
市井に埋もれた中で過ごされました。

ガリラヤはイスラエルの最北に位置するため
に、歴史的に列強の脅威にいつも曝されて来ま
した。アッシリア、バビロニア、ペルシャ、マケド
ニア、エジプト、シリアに次々に制圧され、住民
の捕囚と、他民族の移住が繰り返され、混合人
種、混合文化を産み、ユダヤ人からは、

『異邦人のガリラヤ』

と、蔑視されていました。イエス様がそのガリラ
ヤで、人間として成長されたことには、深い意味
がありました。それは、

『エルサレムで育てられるよりも異邦人達の
心を知り、人間の生きる悩み、苦しみを
一層深く体験されたばかりか、全世界の
救い主としての場に立たれた』

のでした。

イエス様は、また、ガリラヤに戻って宣教され
るのですが、神様に呼び出されて、先ず向かわ
れた所は、

『ヨルダン川で、悔い改めの洗礼を
授けているバプテスマのヨハネのもと』

でした。洗礼は罪を悔い改めるためのもの
です。罪の無いイエス様が何故、洗礼を受けに、
わざわざ数日歩いて、遠くヨルダン川下流まで
行かなければならなかったのでしょうか。

イエス様は御自身の使命をはっきりと自覚なさっ
ていました。それは、

『神様の御心に従われること』

でした。父なる神様は、御子も御自身と
一つ心で、

『人類を愛し、人類を永遠の罪の
滅びから救いたい』

と願って居られることから、御子を人の世に誕生
させられました。それは

『御子が全人類の罪を引き受け、
罪の贖いを成し遂げられるため』

でした。

ですから、イエス様の最初の働きは、

『人類の罪を引き受けること』

から始められなければなりません。

イエス様はその為に罪を抱え、洗礼を受けるた
めに並んでいる人々の列に、御自身も身を置いて
人類に連座してくださったのです。イエス様
はヨハネの前に立たれました。ヨハネはイエス
様の体を水に浸しました。次の瞬間イエス様が
水の中から立ち上がられるとすぐ、天が裂けて、
霊が鳩の様に御自分に下ってくるのを御覧にな
りました。詳訳聖書には、

「彼が水から出てこられた時、直ちに彼は
天が裂けて開かれ、聖霊が鳩の様に、彼の
中に入るために下って来られるのを見た」

と訳されています。イザヤ書63章19節に、

「イザヤは神様に、
『どうか、天を裂いて降ってください』
と懇願しています。

人類の歴史は、人間の罪ゆえに、天を閉ざしてしまいました。神様との豊かな愛の交わりのために創造された人間なのに、人間は、自分の方から神様の愛を裏切り、神様と断絶し、天を閉ざしてしまっただけです。そんな恩知らずで、身勝手な人間のために、神様は創造主の愛を貫き、

『永遠の滅びに向かう人類を救いたいと、御自身の方から、天を裂いて開き、御子を人の世に贖い主として送られたのです。』
イエス様が正しく神の御子であり、神様が遣わされたメシアであることは、
『天が裂け、聖霊が鳩の様に下って、イエス様の中に入られた』
ことによって証明されました。

鳩は目的の場所に来ると、真っ直ぐ降りてくるそうです。聖霊が鳩の様に、イエス様の許に真っ直ぐ降って来られた事は、聖霊もまた、イエス様の働きを待ち焦がれ、働きの備えをしておられたことが分かります。それだけではありません。11節に、

「すると、
『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』
と言う声が、天から聞こえた」
のです。天からの声に優る確証はありません。神様が、
「わたしの心に適う者」
即ち、御心を成し遂げる方として、神様が遣わされた事の宣言でした。

いよいよここから神様による、歴史の目的である人類救済が本格的に動き始めるのです。イエス様は神の独り子、メシア、真の救い主として、神様から御子の宣言を受け、聖霊の内住による、三位一体で、十字架の贖いに向かって歩み始められるのです。

さて、イエス様は十字架の贖いを成し遂げ、復活され、弟子達と再会されると、ヨハネによる福音書、20章21節で、

『父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』
そういつてから、彼らに息を吹きかけて言われた。

『聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る』
と言っておられます。

聖霊はイエス・キリストを信じる者の罪を赦し、清めて下さいます。イエス・キリストによって私達の内にも、聖霊が内住して働いて下さるのです。そして、罪赦され、神の子の身分が与えられ、新しい存在に創り変えられるのです。これこそ真の福音です。私達にとっての福音、それはキリストの名に優るものはありません。この年も、この福音の確かさ、豊かさに生かされて、一層イエス・キリストを信じ、従って行く者と成らせて頂きましょう。

お祈りを致します。
愛と憐れみに富み給う天の父なる神様。

御自身に叛き、この世の思いに従って、永遠の罪の滅びに向かっていた私達人類を、お見捨てになることなく、憐れみ、御子イエス・キリストを人類の贖いのために、十字架に掛けてまで、私達をお救いくださった御愛に、心から感謝いたします。

この知らせこそ、世界への真の福音です。私達の教会が、共に力を合わせ、この福音をしっかりと宣べ伝えて行くことが出来るよう、力を与え、お導き下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。